シリーズ 英文法を解き明かす ③
現代英語の文法と語法

内田聖二／八木克正／安井泉 編

大竹芳夫

談話のことば 1
文をつなぐ

研究社

編者はしがき

シリーズ「英文法を解き明かす――現代英語の文法と語法」は、英語語法文法学会が2012年に設立20周年を迎えたのを期に、学会で培われてきた活動成果を広く社会に還元すべく、出版を企画したものです。

英語語法文法学会は、28名の研究者による設立趣意書を受け、1993年に初代会長小西友七のもと設立されました。その背景には、英語学、言語学の分野において、変形生成文法をはじめとする言語理論の隆盛によって学問的な関心が理論的側面に偏り、研究対象が文法の実証的記述から離れていったことがあります。各種学会での研究発表、シンポジウムが理論的な研究に傾き、個別言語としての英語の記述的な語法研究が正しく評価されない状況にありました。

教育の現場で英語を教え、また英語のあるがままの姿を正しく理解しようと思っている研究者にとって、英語の語彙や構文の特性などの基本的な成り立ちをつまびらかにして、英語自体の理解を深めることこそが、基本的な出発点だと思います。ことばの多様性とそれを説明する筋の通った記述という地道な研究の成果を発表する場を保証することが、本学会の使命のひとつだと思うのです。

1993年11月、第1回大会が立命館大学で開催され、その後、設立の趣旨を実現すべく、さまざまな取り組みがなされてきました。年次大会ではシンポジウム、研究発表のほか、第6回大会からは特色ある「語法ワークショップ」をはじめました。機関誌の『英語語法文法研究』は創刊号(1994年)から毎年刊行され、前年のシンポジウムに基づく論考、応募論文、語法ノートを掲載しています。また、小西友七初代会長の寄付金を基金として、2000年に「英語語法文法学会賞」を、2010年からは若手研究者の育成と研究活動の促進を目的とした「英語語法文法学会奨励賞」を、新設しました。さらに、2005年以降、学会の社会貢献の一環として会員以外の方も参

加できる英語語法文法セミナーを毎年8月大阪で開催しています。これは、英語学・言語学の最先端の学識に触れる機会を広く提供することを目的としたものです。

このシリーズは、「ことばの基礎」「談話のことば」「ことばを彩る」「ことばとスコープ」「ことばの実際」という5つの視座から英語ということばを見つめるものです。「ことばの基礎」ではものの名付け、代替表現などを対象として、名詞と代名詞を第1巻でとりあげ、第2巻では文構造の基本としての動詞を記述の中心に据えます。「談話のことば」では、品詞を超えて文をつなぐ現象を第3巻で扱い、談話と文法的規範からの逸脱との関係を第4巻で考察します。「ことばを彩る」というテーマでは、第5巻でテンス・アスペクト、第6巻ではムード、の観点から英語表現のニュアンスの違いを論じます。第7巻と第8巻は「ことばとスコープ」にあてられ、それぞれ照応表現、否定表現が分析の対象となります。「ことばの実際」では、話しことばの実相を第9巻で提示し、英文法と言語コーパスとの接点を第10巻で記述、説明します。

本シリーズは、英語の文法事象と語法を、最新の知見からわかりやすく解説するとともに、その研究成果を英語教育の現場で役立つ情報として盛り込むことで、研究と教育の両面から包括的に、発話者の「心」を伝える英語表現の仕組みを解き明かすことを目指すものです。

2016年3月

編者
内田聖二
八木克正
安井　泉

はしがき

私たちは感情や考えを伝え合うために文を話し、そして書く。述べ足りないときには情報を補足するために文をつなぎ、逆にまとまった内容を述べ終えたときには文をつなぐことをやめる。また、文を途中まで話していて、ふとことばが出てこなかったときには、相手が情報をつないで文を補完してくれることもある。英語の談話を観察すると、英語話者が文をつなぐ方法は一様ではなく実にさまざまな工夫を施していることがわかる。例えば、接続表現を用いて、接ぎ木の台木に穂を「接ぐ」ように文と文をぴたりとつなぐことがある。(1)では I'm leaving という文に、理由を表す接続詞 because から始まる it's simply time to go という文を接着させてつなぐことで因果関係が明示され、情報に流れが生まれて話の筋が通るようになる。

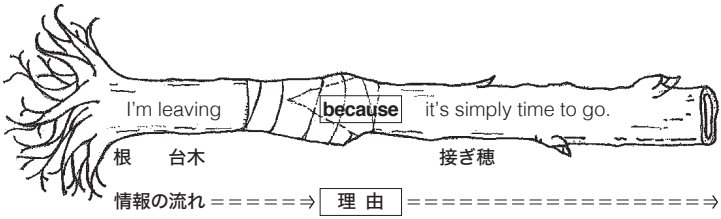
(1) I'm leaving because it's simply time to go.

(*The New York Times*, Feb. 20, 1986)

(単に辞め時だから私は職を辞するんだ)

木に竹を接ぐことはできないが、親和性のある種同士であれば接げないわけではない。例えば、活力あるノイバラを台木に園芸品種のバラの穂を「接ぐ」ことで、養分の受け渡しができる 1 つの個体となり、やがてきれいな花を咲かせる。話し手が接続表現を活用して文をつなぎ、話の筋、情報のつながりを積極的に聞き手に伝える工夫は、これとよく似ている。

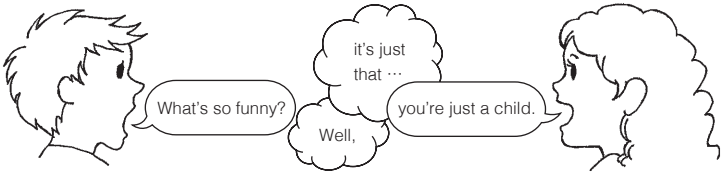
(2)



一方、話し手が文を「接ぐ」のではなく、そのままでは聞き手に誤解を生じさせたり意図が正しく伝わらないようなむき出しの情報、当該文脈や場面と親和性のない情報を担う文を「つなぎ表現」を介してつなぐこともある。(3)ではブラッドの What's so funny? (何がそんなにおかしいの?)という質問に対してクリスが即答するのではなく、思慮を巡らせながら釈明を切り出すことを告げる「つなぎ表現」として Well (だって)と it's just that (ただその)を発話した後に、ためらいの「間(ま)」を介してブラッドの言動の幼稚さを揶揄する you're just a child (まだ子供なんだもん)という内容を伝えている。Well, it's just that とそれに続くためらいの「間」は、相手の質問を受けて、その答えを相手にむき出しのまま荒々しく返すことを回避する緩衝機能を果たしている。

(3) Brad Anderson: What's so funny?
Chris Parker: Well, it's just that . . . you're just a child.
(映画の台詞: *Adventures in Babysitting*, 1987)
(ブラッド・アンダーソン: 何がそんなにおかしいの?
クリス・パーカー: だって、ただその . . . まだ子供なんだもん)

(4)



ことばによるコミュニケーションでは、情報を受け取る相手が必ず存在する。話し手(書き手)が聞き手(読み手)に一切配慮せず、思いつくままに文を並べて発話すれば、筋がなくばらばらで支離滅裂な発話、あるいは配慮に欠けた発話となる。蕎麦を打つときに、そば粉に「つなぎ」として小麦粉や鶏卵を混ぜ合わせることで生地のまとまりがよくなるのと同じように、発話場面や文脈に応じたつなぎ表現を発話に織り込むことによって、伝達内容のまとまりや相手の理解に対する配慮を表出することができる。もち

ろん、「つなぎ」を使わないで打つ十割蕎麦が香り高く人気があるように、聞き手の理解に負担がかからない配列順序で文がつながれている場合や、場面や文脈から容易に意味関係を推測できる場合などには、つなぎ表現を使う必要はない。

本書では文を「接ぐ」事象、文を「つなぐ」事象の両方を扱い、英語の接続現象を支える発話者の感性や発想、つまり「心のひだ」に迫ることを目指す。

本書は、第 1 章から第 6 章までの 6 つの各論と第 7 章の結語で構成される。第 1 章では、基本的な事例をもとに「文をつなぐ」仕組みについて論ずる。例えば(5)では、場面や文脈の情報を引き継いでつなぎ合わせる指示表現 it と that の選択には、それが指示することがらを話し手が心にどのようにとらえているのかが反映される(p. 10 参照)。

(5) a. Add seven to five. Now subtract it from twenty.
(5 に 7 を足しなさい。次に 20 から 7(＝it) を引きなさい：it＝7)

b. Add seven to five. Now subtract that from twenty.
(5 に 7 を足しなさい。次に 20 からその計算の結果得られた数(＝that)を引きなさい：that＝12)　((5a), (5b)：Wolter 2006：202)

第 2 章では、「文をつながない」、つまり発話を終結させるメカニズムを明らかにする。例えば、(6)のように話し手が whatever を用いて、相手の発話内容に無関心な態度で応答し、相手の話題を展開する文をつなぐことを拒絶する事象を考察する(p. 44 参照)。

(6) Shirley: Samel, you gonna make that phone call today?
Samel: Yeah, whatever.　(映画の台詞：*Everyday People*, 2004)
(シャーリー：ザメル、その電話は今日かけるの？
ザメル：まあ、別にどうでもいいだろ)

第 3 章「話し手の心を映し出して文をつなぐ」では、話し手の価値感覚や配慮意識がつなぎ表現として具現化することを実証的に明らかにする。一例を挙げると、(7)に見るように、相手にへりくだった態度を示して「ひ

と言、よろしいですか？」などあらかじめ告げてから本題につなぐ Can I put my two cents in? のような口語表現を取り上げて、つなぎ表現から見えてくる話し手の心の有り様を浮き彫りにする(p. 54 参照)。

(7) "I beg your pardon." Quinn sat on the edge of the wing chair. "But if I could put my two cents in . . ." "Take your best shot," Cale said.

(M. Stewart, *If Only in My Dreams*, 2015)

(「失礼ですが」とクインはそで椅子に浅く腰掛けて言った。「ひと言、言わせていただければ . . .」「言ってみてくれ」とケイルが言った)

第 4 章では「聞き手の理解に負担をかけずに文をつなぐ」をテーマとし、話の方向を変える場合や、情報を訂正、補完する場合に用いられるつなぎ表現を分析する。例えば、(8)のように話し手が言いよどんだときに、聞き手の手助けによって未完結の部分に情報をつないで補完してもらい発話を完結する現象について論ずる(p. 123 参照)。

(8) Brock Lovett: This is Brock Lovett. How can I help you, Mrs. . . . ?
Bobby Buell: Calvert. Rose Calvert.
Brock Lovett: Mrs. Calvert? (映画の台詞：*Titanic*, 1997)

(ブロック・ロヴェット：はい、ブロック・ロヴェットです。いかがなさいましたか？ ミセス . . .
ボビー・ビューエル：カルヴァート。ローズ・カルヴァートだよ。
ブロック・ロヴェット：ミセス・カルヴァート？)

第 5 章「場面や文脈情報と関連づけて文をつなぐ」では、静寂の「間(ま)」をことばにしてつなぐ事象や、直前の発話内容を理由としてつなぐ just because 節などの分析を通して、場面や文脈情報と文とのつながりについて解き明かす。例えば、(9)に見るような、発話直前までは意識が払われていなかったにもかかわらず、突発的に知覚された新たな状況を談話に切り出す the next thing の特性について考察する(p. 132 参照)。

(9) "I just remember going into hospital in the morning, and the next thing I woke up in intensive care three weeks later. [. . .]"

(*The Guardian*, Sept. 12, 2003)

(「私は午前中に入院したことだけは覚えています。気がついたら、3 週間後に集中治療室で目がさめたのです。[. . .]」)

第 6 章では、「情報の橋渡しをして文をつなぐ」というテーマのもとに、過去と対比して現在の状況をつなぐ表現 once upon a time，話し手が情報を事実認定してからつなぐ表現 as a matter of fact などを観察しながら、情報がつなぎ合わされる特徴を明らかにする。同一内容の反復を避けてつなぐ表現も考察の対象である。(10)の小説の子供の会話例では、自分も気に入ったということを伝えるのに、Me too の too を数字の two に掛けてことば遊びをしながら、子供たちが互いの発話をつないで楽しんでいる様子が描かれている(p. 182 参照)。

(10) "[. . .] I like them!" "Me too," Dan said. "Me three," said Andy. "Me four," Kevin agreed. "Me five," said John. "Me six," Trevor giggled at the counting! (L. D. Hart, *Restoring Acres*, 2013)

(「[. . .] 僕、気に入ったよ！」「僕も」とダンが言った。「僕も」とアンディが言った。「僕も」とケヴィンが言った。「僕も」とジョンが言った。「僕も」とトレヴァーが数を数えてくすくす笑った！)

第 7 章では、本書の分析と考察を振り返り、英語ということばをあらためて見つめ直す。

本書は本シリーズの刊行の趣旨に沿い、発話者の幾重にも折りたたまれたその心のひだを丁寧に読み取って、「文をつなぐ」仕組みを解き明かすことを究極の目標とする。副詞、接続詞、談話辞を網羅的に論ずるのでもなければ、体系的に説明するものでもない。しかし、映画、ドラマ、新聞、小説と多岐に渡る生きた言語資料の観察と分析を通じた裏づけを積み重ねながら、限られた英語の接続現象を実証的に分析することで、英語話者の生き生きとした発想や複雑で繊細なもののとらえかたをつまびらかにすることを目指している。

本書は多くの方々のご指導とご協力のおかげで完成したものである。本シリーズの編者であり、本書執筆の機会を与えてくださった内田聖二先生、

八木克正先生、安井泉先生からは英語語法文法学会をはじめさまざまな機会やご論著から学問的な刺激を大いにいただいてきた。安井泉先生には筆者が筑波大学、筑波大学大学院の学生時代から今日まで温かなご指導をいただき、本書についても多くの有意義なご助言を頂戴した。英語語法文法学会第 1 回大会に筆者が参加できたのは設立発起人の安井泉先生からお声をかけていただいたおかげであり、同学会誌『英語語法文法研究』創刊号(1994 年)に採択された投稿論文「It is that 構文に関する意味論的、語用論的考察」から学究への道の第一歩を踏み出すことができた。その後『英語語法文法研究』に採録いただいた 4 編の論文の研究成果は『「の(だ)」に対応する英語の構文』(2009 年)の上梓につながっている。

本シリーズの執筆者である吉良文孝氏、中山仁氏とは折りあるたびに意見を交わし、励ましてもらった。ここに記して感謝を申し述べたい。

本書の出版に際して、研究社編集部の津田正氏には編集作業の細部にわたりお世話になった。守屋岑男氏には校正の段階で貴重なコメントとご指摘を頂戴した。両氏に厚く御礼を申し上げる。

最後に、執筆中は長きにわたり、励まし応援をしてくれた家族の支えがあったことを書き留めておきたい。

なお、本書の研究成果の一部は、平成 27–30 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号 15K02592「日英語の文連結現象において指示表現と名詞節化形式が果たす役割に関する総合的研究」(研究代表者:大竹芳夫)の補助金助成を受けている。記して感謝を申し上げたい。

2016 年 6 月

大竹芳夫

目 次

編者はしがき　iii
はしがき　v

第1章　文をつなぐ　1

1.1　文脈に解き放してつなぐ　1
1.2　さまざまな形式でつなぐ：並置、等位接続、従属接続　5
1.3　指示表現を選んでつなぐ：it と that の選択　10
1.4　共通要素をくくり出してつなぐ：“She bought X, Y, and Z.”と“She bought X, she bought Y, and she bought Z.”　13
1.5　基本的な単語を組み合わせた表現でつなぐ：but then　16
1.6　名詞句でつなぐ：There wasn’t a sound, a fact which . . .　18
1.7　コンマだけでつなぐ：You want to see him, you go.　21
1.8　異なる形式で共通要素につなぐ：関係節と前置詞句の等位接続　23
1.9　伝達部を引用の途中でつなぐ：“Dr Cooper,” the President began, “do sit down.”　24
1.10　天候・明暗・時間などを表す文と形式主語構文を 1 つの主語 it でつなぐ：It was drizzling rain and foggy and impossible to see very far.　27

第2章　文をつながない　30

2.1　未完結のまま発話を終結する　30
2.2　積極的に発話を終結する(1)：That’s that. と That’s it.　31
2.3　積極的に発話を終結する(2)：“Period. Full stop. End of story.”　34
2.4　文をつなぐことを拒否する(1)：名詞化される接続表現 no ifs, ands or buts　37
2.5　文をつなぐことを拒否する(2)：相手を苛立たせる表現 whatever　40

第3章　話し手の心を映し出して文をつなぐ　46

3.1　確信の揺れを表現してつなぐ：{perhaps / maybe} not　46
3.2　抵抗感を表現してつなぐ：I hate to say {it / this}, but . . .　49
3.3　へりくだった気持ちを表現してつなぐ(1)：if I can put my two {cents / pennies} in　53
3.4　へりくだった気持ちを表現してつなぐ(2)：in my humble opinion　57
3.5　相手の依頼や確認にひと呼吸おいてから承諾・承認表現につなぐ：why, {yes / sure}　61
3.6　相手に許可を求めて補足的情報をつなぐ：let me add . . .　64
3.7　価値意識を反映してつなぐ：but　66
3.8　前の事実から期待される結果に反する事実をつなぐ：and　68
3.9　釈明をつなぐ：It is just (that) . . .　72
3.10　情報価値のある内容を婉曲に伝えてつなぐ：for {what / whatever} it’s worth　76

3.11　真偽のほどは保証しないで伝聞情報をつなぐ：文修飾副詞 allegedly　80
3.12　論証可能な情報であることを認定してつなぐ：文修飾副詞 arguably　83
3.13　冷静かつ論理的に文をつなぐ：アメリカの宇宙ドラマ『スタートレック』のミスター・スポックの台詞に学ぶ　88

第4章　聞き手の理解に負担をかけずに文をつなぐ　93

4.1　結束性と首尾一貫性を保ってなめらかにつなぐ　93
4.2　相手の記憶に残したい情報を文末に置いてつなぐ：動詞（句）前置 I have determined to go, and go I shall.　97
4.3　情報を訂正してつなぐ：（or, ）rather　99
4.4　適切な情報に切り替えてつなぐ：（or,）better　101
4.5　話の方向を本題から突然そらしてつなぐ：by the way　102
4.6　話の方向を本題からそらさないことを装ってつなぐ：｛I don't mean to / not to｝change the subject　108
4.7　他の理屈や事実に理解を示しつつ反論につなぐ：It is true（that）α but β　113
4.8　付言をつなぐ：for that matter　116
4.9　常識や予想を打ち消してつなぐ：on the contrary　119
4.10　相手の発話を補完してつなぐ　122
4.11　命令文を連続してつなぐ：Run, Forrest! Run!　124

第5章　場面や文脈情報と関連づけて文をつなぐ　127

5.1　場面や文脈情報と結びつけてつなぐ：I'm fine.　127
5.2　静寂の「間」をことばにしてつなぐ：“A silence. . . . Another silence.”　129
5.3　突発的に知覚した状況を継起関係に基づいてつなぐ：“（the）next thing（, ）”, “（the）next thing S＋V（, ）”　131
5.4　話題を提示してつなぐ：as for　137
5.5　主文が表す事態にそれが至り及ぶ状況をつなぐ：｛till / until｝節　139
5.6　ステップの完了と開始をつなぐ：once 節　144
5.7　重要な情報の伝達を告げてつなぐ：文修飾副詞 importantly　148
5.8　文頭に独立する名詞句を伴う文をつなぐ：An avid reader, Hancox was largely self-educated.　154
5.9　直前の発話内容を理由としてつなぐ：just because 節　159
5.10　内実や例外を追述してバランスよくつなぐ：｛having said that / that said｝　162

第6章　情報の橋渡しをして文をつなぐ　167

6.1　過去と対比して現在の状況をつなぐ：once upon a time　167
6.2　過去の場面設定から具体的叙述へとつなぐ：used to から would へ　174
6.3　先行情報と比較しながら新情報をつなぐ：比較を表す形容詞句を文頭に立てる倒置構文　176
6.4　比例関係をつなぐ：2 つの比例構文　179
6.5　同一内容の反復を避けてつなぐ：so＋｛助動詞 / be 動詞｝＋主語構文と“Ditto.”　181

6.6　情報を事実認定してつなぐ：as a matter of fact　188
6.7　倒置してつなぐ：as＋{助動詞 / be 動詞}＋主語構文　191
6.8　条件と結果を直截的につなぐ：名詞句＋{and / or}＋文　195
6.9　条件や制限を補足してつなぐ：if 節、unless 節、when 節と共起する{that is / that is to say}　196
6.10　同時や直前に発生することがらをつなぐ：just when と just before　200
6.11　従属節を独立させてつなぐ：because 節　202
6.12　分詞構文でつなぐ　205

第7章　結語―英語ということばをあらためて見つめ直す―　210

参考文献　213
索　引　216

第1章

文をつなぐ

She bought a red dress, a green one, and a blue one. と She bought a red dress, she bought a green dress, and she bought a blue dress. という 2 つの形式は、数学の展開と因数分解の関係のように等価に見える。しかしことばには、数学でイコールで結びつけられるような関係の文は存在しない。この 2 つの文に関しても、後者には前者にはない「彼女がこれも買ったしあれも買った」と彼女が買いすぎたという含意がある(Bolinger 1977: 7)。これは文をつなぐときに話し手の心が映し出されることを示す 1 つの事例である。本章では基本的な事例をもとに「文をつなぐ」仕組みを解き明かす。

1.1　文脈に解き放してつなぐ

発話は聞き手の知識や発話される文脈の情報とつながることで初めて、話し手が意図する意味が伝達される。Kiparsky and Kiparsky (1971: 367)は、He's an idiot. という文は聞き手の知識や前後の文脈情報とつながっていなければ、(i)〈話し手が一定の証拠に基づいて事実認定して〉「彼には知的障害がある」という意味なのか、それとも (ii)〈話し手の心に浮かんだ個人的な考えとして〉「彼はばかだ」という意味なのか、あいまいなままであると説明する。Kiparsky and Kiparsky (1971: 367)によれば、この意味解釈のあいまいさがあるがゆえに、(1)のように話し手 A の発話に対して話し手 B のような確認の問いかけが続くかもしれないし、さらには(2)のように Why 疑問文になる場合にも、事実を直接的に証明する証拠を理由とす

第2章

文をつながない

会話を終結するとき、「終止符」という意味の “Period.” や “Full stop.” を話し手が音声で発話することがあるのはなぜであろう。「別に」のように相手が持ち出した話題の展開を拒否して文をつながない英語表現には、どのようなものがあるのであろう。また、発話を結ぼうと “That’s that.” と伝えたにもかかわらず相手に拒まれることはあるのであろうか。本章では、「文をつながない」、つまり発話を終結させるメカニズムを解き明かす。

2.1　未完結のまま発話を終結する

話し手が発話途中であるにもかかわらず発話を終結し、文をそれ以上はつながないことがある。まず、話し手の発話途中に聞き手が口を挟んできたために、未完結のまま発話を終結せざるをえない場合がある。

（1）“Thanks,” Laurie said. “I’ll try to be patient. It’s just that —” “I know, I know,” John interrupted. “I get the picture already. Please!”

（R. Cook, *Blindsight*, 1993）

（「いいだろう。待ってみるか。ただ、実はその . . .」とローリーが言った。「わかってる。わかってるって」とジョンが口を挟んだ。「すでに写真を手に入れているんだ。頼むよ！」）

(1) では、ローリーが It’s just that — と言いかけたところでジョンが口を挟んできたために、未完結のまま発話をやめてしまったことがわかる（ここ

第3章

話し手の心を映し出して文をつなぐ

ことばをむき出しのまま発しても聞き手には受け入れてもらえない。聞き手と良好な関係を保ちながら情報を交換するとき、英語ではどのような「つなぎ表現」が活用されるのであろう。本章「話し手の心を映し出して文をつなぐ」では、I hate to say {it / this} . . . (言いにくいことですが . . .)や Can I put my two cents in? (ひと言、よろしいですか ?) などのつなぎ表現を用いる話し手の心のひだの奥底に潜む「文をつなぐ」仕組みを解き明かす。

3.1　確信の揺れを表現してつなぐ：{perhaps / maybe} not

可能性を推し量るとき、さまざまな表現を活用して話し手は確信の度合いを心のひだの表れとして伝える。日本語の「ことによると」、「ひょっとすると」や英語の perhaps, maybe もそうした話し手の確信の度合いを表出する副詞となる。Biber et al. (1999) が記述するように、perhaps は maybe よりも学術論文や小説で多く用いられるが、逆にアメリカ英語の会話では perhaps よりも maybe が圧倒的に多く用いられる。また、先行する発話内容に対して、控え目に肯定的見解を示すためには perhaps, maybe が用いられ、控え目に否定的見解を示すためには否定辞 not を伴う perhaps not, maybe not が用いられる。次の例では相手の質問に対して話し手は perhaps not と返答し、否定断定を避けて控え目に否定的見解を伝えている。

(1) ‘Would YOU like cats if you were me?’ ‘Well, perhaps not,’ said Alice

第4章

聞き手の理解に負担をかけずに文をつなぐ

人間が記憶する情報には限界がある。話し手は文をつなぐとき、聞き手の記憶に残るよう力点を置きたい情報を工夫して配列する。また、話の方向を変えたり、情報を訂正、補完する場合にも聞き手に対する配慮を伝えるつなぎ表現を用いるが、実際はことを荒立てなくするための単なるリップサービスであることも多い。本章では、「聞き手の理解に負担をかけずに文をつなぐ」をテーマとし、文をつなぐさまざまな事象の背後に潜む情報伝達の創意工夫を解き明かす。

4.1　結束性と首尾一貫性を保ってなめらかにつなぐ

文と文とをつなぐ方策について考える。話し手は文と文とをつないでまとまりのある談話を組み立てるとき、聞き手の理解に負担をかけずに情報が効率よく伝わるようにさまざまな工夫を施す。例えば、次の例は2010年度ピューリッツァー賞を受賞したPaul Harding著 *Tinkers*（2009）からの抜粋であるが、文と文とをつないで場面中の室内にある事物の存在を導線として配列し、最後に人物を談話に登場させている。それは、読み手がまるでその場面の状況を映像として知覚しているかのごとく描き出されている。

（1）The room was lit only by a small pewter lamp set on one of the end tables near the couch. The couch ran along the length of the hospital

第5章

場面や文脈情報と関連づけて文をつなぐ

単語と同様に、文も場面や文脈のさまざまな情報とつながることで初めてその意味が定まる。ある場面で突発的に知覚した新たな状況を談話に切り出す the next thing や、文と文をつなぐ静寂の「間(ま)」をことばにしてつなぐ表現、軽蔑的態度や無関心といった含みをしばしば伴って話題を談話につなぐ as for などを本章では取り上げ、「場面や文脈情報と関連づけて文をつなぐ」さまざまなつなぎ表現の特性を解き明かす。

5.1　場面や文脈情報と結びつけてつなぐ：I'm fine.

多くの単語は多義的である。例えば handsome は、①〈男性が〉「端正な顔立ちの」、②〈女性が〉「体格や態度が魅力的な / 知的にきりりとした」、③〈建物などが〉「見事な」、④〈金額などが〉「相当な / 気前のよい」などのたくさんの意味を持ち、具体的な場面や文脈とつながることで意味が特定される。文もまた、場面や文脈の様々な情報と結びつけてつながることによって、まぎれなく特定の意味を伝えることができる。ここでは、会話の基本的な表現である I'm fine. を例に考えよう。次の(1a), (1b)の場面ではいずれも I'm fine. が発話されているが、(1a)の How are you?(元気かい?)と相手に尋ねられる場面では、「元気だよ」という意味を表す。一方、相手にお茶を勧められる(1b)の場面では、I'm fine. は「結構です(最近の若者ことばでは「(断る意味での)大丈夫です」)」という意味を表す。

第6章

情報の橋渡しをして文をつなぐ

once upon a time, so do I, as a matter of fact などは、いずれも中学校や高等学校で学習する基本的な英語表現である。しかし、実際の発話場面や前後の文脈を丹念に観察すると、これまで明かされてはこなかった本質的な特徴が見えてくる。また、過去の習慣を表す used to と would が同一談話で連続して発話される事象を分析すると、コミュニケーションが文レベルの文法に加えて、文と文とをつなぐ仕組みをつかさどる談話レベルの文法によっても支えられていることが浮き彫りになる。本章は、「情報の橋渡しをして文をつなぐ」多様な表現の特性を解き明かす。

6.1　過去と対比して現在の状況をつなぐ：once upon a time

“Once upon a time there lived a poor widow who had an only son named Jack.”（「むかしむかし貧しい未亡人が一人息子のジャックと一緒に住んでいました」）once upon a time から始まるこの一文は、おとぎ話 *Jack and the Beanstalk*（『ジャックと豆の木』）の冒頭文である。

once upon a time はむかし話やおとぎ話の書き出しで定型表現のように用いられ、子供たちにも馴染み深い定型的な副詞表現となっている。しかしながら、once upon a time は子供向けのむかし話やおとぎ話での典型的な場面設定表現としての使用に限られるわけではない。新聞記事やニュースなどでも once upon a time は広く観察され、過去の状況を現在の状況と対比しながらつなぐ重要な機能を発揮している表現である。

第7章

結　語

――英語ということばをあらためて見つめ直す――

人の心の中を理解することは難しい。心情や感情はとても複雑で繊細であり、普段は表面に現れないからである。しかし、人がことばを通して情報をやりとりする以上、ことばには心の有り様やものの考え方が映し出されるはずである。

本書では、「文をつなぐ」接続事象に光を当てながら60項余りの例を取り上げて具体的に論じ、英語話者の心の奥底に潜む独特の感性や発想に迫ってきた。特定の理論だけにとらわれることなく、小説、新聞、映画の台詞などの生きたデータの観察と実証による裏づけを積み重ねながら、文をつなぐ表現と構文の特性をひとつひとつ明らかにする姿勢を貫くことを心がけた。英語の文をつなぐ表現や構文は数多い。すでに国内外の先人たちによる語法文法研究や最近の大規模コーパスを活用した分析対象となり、さまざまな角度から解明が進んでいる事象も少なくはない。しかしながら、これまでまったく論ぜられてこなかった事象や、従来の文法書や辞書に記載されていても文脈や場面とのつながりが考慮されてこなかったために、不十分な分析にとどまってきた事象が多いこともまた事実である。本書では、これまで光を浴びてこなかったそうした「文をつなぐ」接続表現や構文を丹念に掘り起こし、実際の用例を吟味しながら実証的にその特性を明らかにしてきた。行きつ戻りつしながら踏み固め、歩んできた道を振り返ると、英語ということばの実像、英語話者の感性や発想がはっきりと見えてくる。

まず見えてきたのは、ある種の緊張感で文がつながれる英語ということ